



飛翔二十歳を祝う会

214人の新たな門出を祝う

1月11日（日）、令和8年「飛翔 二十歳を祝う会」が中央公民館で開催されました。平成17年4月2日から平成18年4月1日生まれの214名が対象で、式には155名が出席し、仲間との再会を喜ぶとともに新たな門出を祝いました。式では、新成人を代表して杉原阿弥さんが二十歳の誓いを述べました。



二十歳の誓い



新成人代表
杉原 阿弥さん

私たちは今日、二十歳という人生の大きな節目を迎えました。この機会に、作家・落合恵子さんの著書『泣き方を忘れていた』の一章をご紹介します。――

「人生は、一冊の本である。そう記した詩人がいた。もしそうであるなら、今日までわたしはどんな本を書いてきたのだろう。」――

皆さんがこれまで重ねてきた二十年は、どのような物語だったでしょう。きっとそれぞれの歩みがあり、そのすべてに意味があったはず。私自身は、これまで出会った多くの人々との関わりが、物語を豊かにしてくれたと感じています。

私が出会いの意味を深く考えるようになった契機は大学で出会った一人の友人の存在です。彼女は昨年、心筋梗塞で亡くなりました。わずか十九年という生涯は決して長いものではありません。しかし、困難に向き合う際に見せた揺るが

ぬ心の強さ、そして「国連に入り、難民支援に携わりたい」という真摯な夢から、私は計り知れないほど多くのことを学びました。

落合恵子さんは後のインタビューで、「人生があと何ページ残っているかは分からない。だからこそ、今の自分を大切にしたい」と語っています。落合さんの言葉の通り、私たちは自分の物語がどれほど続くのかを知りません。しかし、限りがあるからこそ、一つ一つの出会いを丁寧に受け止め、自らの選択を誠実に積み重ねていくことに、かけがえのない価値が宿るのだと思います。

これから私たちが刻んでいくページは、偶然に委ねられるものではなく、自らの判断と行動によって確かに築かれていくものです。その不断の積み重ねが、未来を単なる余白ではなく、揺るぎない足跡へと変えていきます。社会の一端を担う者として、二十歳を迎えた今、私たちは自分自身の選択に責任を負い、覚悟をもって次のページを描いていきます。

最後に、私たち一人ひとりのこれからの歩みが、深い学びと確かな希望に満ちたものとなることを願い、二十歳の誓いいたします。

※要旨抜粋